

2008 年度卒業論文(生活福祉分野)発表会資料

知的障害者の就労・生活支援におけるグループホームに関する研究

—企業就労している知的障害者を対象として—

総合社会システム専攻 N05-5137

丸小野 未央

指導教員 加瀬 進

1. はじめに

障害者に対する保健福祉、教育、雇用をめぐる最近の一連の動きはめまぐるしいものがある。これらの動きを視野に入れながら、障害のある人の就労を促進するには、職業教育の充実や雇用後の教育訓練と企業内キャリアの育成、雇用と福祉的就労との相互移行などの多くの課題が残っていると松為(2002)は述べている。そのような課題を改善していくためには、様々な領域にまたがる機関が有機的に連携し、それぞれの支援機関の有する専門的な知識や技能を有効に活用し、地域レベルで相互に連携のとれた支援を行う必要があると、東京都社会福祉協議会・東京都知的障害特別支援学校就業促進研究協議会(2008)による知的障害者就労支援研究報告書において提言がなされている。そして、研究報告書の中では述べられていなかった、「就労支援に関しては、ハローワークや就労支援センターが一斉管理し、生活支援はグループホーム(以下、GHと示す)などの機関において、日常生活の中からスタッフによるサポートを得られるような支援体制の構築が必要である」という提言が作成段階でなされていた事を知り、個々の知的障害者の就労支援ネットワークを前提として更に必要とされている「働く知的障害者の就労・生活支援拠点」としてのGHの重要性を大きく感じた。しかし、一般就労を行う利用者に焦点を当てた研究はなく、就労・生活支援の拠点としてのGHにおける具体的な事が把握されていないのが現状である。そこで、知的障害者のGHでの就労・生活支援の実態を明らかにする必要があると考える。

2. 目的

GHにおいて一般就労を行いながら生活している利用者にとって、GHはどのような役割を担い、影響をもたらしていくのかを明らかにすることを目的とする。

3. 方法

(1) 知的障害者就労支援研究報告書『福祉、教育、労働の連携による知的障害者の就業・生活支援』の読み込みと都立あきるの学園特別支援学校進路担当者への訪問

期間：2008年5月～6月

内容：2008年4月に出版された、知的障害者就労支援研究報告書を読み込み、現在の特別支援学校卒業生の就労状況を把握するとともに、教育、福祉、労働が連携して就業・生活支援を行っていく事の重要性について調査結果とそれをもとになされた提言から考察した。また、研究報告書の内容に関する疑問点をピックアップし、都立あきるの学園特別支援学校進路担当の原智彦先生からその疑問点についてご意見をいただいた。また、報告書の中には明記されていない、作成時に出されていた意見等についてのお話も伺った。

(2) 知的障害者に対する聞き取り調査

期間：2008年10月22日～29日

対象：都立あきるの学園特別支援学校進路担当の原先生・菊池先生の協力のもと、卒業生の中から協力していただける方を募り、またその中から8名に絞って調査を行った。

内容：読み込みを行った知的障害者就労支援研究報告書をもとに調査項目を考え、以下の点を中心に調査を行った。

- ・仕事(求職中の方は求職)に関する質問
- ・GHでの生活に関する質問
- ・自宅での生活に関する質問

4. 結果

(1) 知的障害者就労支援研究報告書の読み込みと都立あきるの学園特別支援学校進路担当者への訪問

調査研究結果を見ていくと、知的障害者の就労支援は、特別支援学校における進路学習と就労体験、評価を経て「個別移行支援計画」をまとめていくという、職業上のスキルを向上させるノウハウが一定程度浸透し、それに

よって就業の場は様々な職域に広がりを見せ、障害者雇用に関わる諸制度や支援機関の充実も着実に図られているという事が伺えるが、生活支援においては決して十分とは言えず、更なる充実を図っていく必要がある。知的障害者の更なる雇用促進を図るうえでは、就労支援とともに生活支援、特に精神面に対するサポートが同時に行われなければならない。

また、あきらの学園特別支援学校進路担当の原智彦先生への訪問の際、特別支援学校において早期から支援機関と連携を図り、卒業後の定着支援の在り方を確立するためのフォローアップをしているつもりだが、そこから次の支援に至るまでに谷間が生じてしまっているのが現状であり、また、就労支援センターも早期から対応しているものの、限界があるという事を伺った。そして、決して単発なものではなく、労働時以外の一日の生活を常時見守る事のできるGHが、今後の就労・生活支援の大きな鍵を担っているという事も伺う事ができた。

(2) 知的障害者に対する聞き取り調査結果

計6事例、対象者8名の概況は以下の表の通りである。

事例①	Sさん(22) 男性 愛の手帳：3度 障害程度区分：不明 居住環境：自宅 就業先：食肉加工工場にて肉の袋詰めなど
事例②	Oさん(25)、Mさん(20) ともに女性 愛の手帳：Oさん 3度・Mさん 4度 障害程度区分：Oさん 3・Mさん 2 居住環境：GH 就業先：共に求職中(Oさんはレストランでの調理補助、Mさんは企業内での事務業務経験あり)
事例③	Kさん(22) 女性 愛の手帳：4度 障害程度区分：不明 居住環境：自宅 就業先：レストランにて調理補助業務
事例④	Mさん(19)、Sさん(19) ともに女性 愛の手帳：Mさん 4度、Sさん 3度 障害程度区分：Mさん 2、Sさん 3

	居住環境：GH 就業先：Mさん 企業内の清掃 Sさん 企業食堂にて調理補助業務
事例⑤	Mさん(19) 女性 愛の手帳：4度 障害程度区分：3 居住環境：GH 就業先：郵便局内の清掃(過去に食品加工工場での勤務経験あり)
事例⑥	Aさん(20) 男性 愛の手帳：3度 障害程度区分：3 居住環境：GH 就業先：野菜加工工場にて洗浄作業

① 事例1 Sさん

GHで生活した事により、身の回りの事を自分で行うという事を身に付け、自宅に戻ってからそれが生かされている。家族のもとから離れ、見知らぬ土地で生活するという事自体がSさんにとって大きな成長であり、SさんにとってGHでの生活経験、GHとその仲間の存在は大切なものとなった。

② 事例2 Oさん・Mさん

Oさん

GHで家族でない、他人同士と同じ空間で生活する事で、相手の事を考えて行動するという事や身の周りの事は自分で行うという習慣を身に付けた。また、同じ障害者同士と一緒に生活している事で、悩みを共有できたり、お互いに気持ちを分かり合えたりする安心感をもって生活している。

Mさん

一人暮らしを経験し、一人暮らしのメリット・デメリットを知ったうえで、一緒に暮らす仲間の存在や家事の負担の軽減、また困った時の対処をしてくれる世話人の存在など、一人暮らしをしたからこそ分かるGHの良さがある。また、一人暮らしをしていた際にも、世話人が常にサポートしてくれていた。→自立しても見守り続ける存在。

③ 事例3 Kさん

GHに入居前は家事の手伝いに関して受動的であった

が、GHで自主的に家事を行う習慣が付き、現在もそれを継続できている。GHでの生活では、常に聞き役に徹してしまう性格もあり、GH内の人間関係のトラブルに巻き込まれていたが、その中でも中立的な立場として仲間の相談にのってあげていた。その仲間は、自宅に戻った現在においてもKさんにとって大きな存在となっている。

④ 事例4 Mさん・Sさん

Mさん

家族で生活していた際はきちんとした生活習慣が身に付いていなかったが（お風呂に入らない、自炊はしていない etc）、GHでの生活で身の周りの事は自分で行うという習慣が身に付ける事ができた。また、共同生活のルールを理解しながら生活できるようになった。また、GHで生活力を十分に身に付け、いずれはまた家族一緒に生活したいという目標を持って生活できている。

Sさん

休日に自宅に戻っている際には、両親の負担を少しでも減らすべく家事の手伝いを自主的に行っている。それは、GHで生活し始めてから家事の負担を減らす事が家族を助ける事につながると自らが感じた事ができたからであった。また、以前は積極的にコミュニケーションを図るのが苦手であったが、GHの世話人や他の居住者と積極的にコミュニケーションが図れるようになった。

⑤ 事例5 Mさん

GHでの世話人との何気ない会話の中から、以前の職場での悩みを引き出してもらえた事で、Mさんの精神的負担が取り除かれた。また、GHに来て人の温かさやぬくもりを感じる事ができ、充足感を得ている。また、自分の事を理解してくれる人達がGHにいるという事をMさん自身が実感できた事で、GHに来てから自ら積極的にコミュニケーションがはかれるようになった。

⑥ 事例6 Aさん

GHに入居する前は友達や親に対して暴れる事もあったが、現在は利用者とのコミュニケーションがきちんと図られていて、また、女性の利用者が多いGHの中でもトラブルを起こす事なく生活できている。常にAさんの様子を気にして、心配してくれている世話人の存在をは

じめ、Aさんには以前にはなかった、様々な場所に相談できる人がいる。

5. 考察

聞き取り調査結果の分析から、①生活しながらにして、同じ障害者同士にしか分からない悩みを、共有でき、互いの気持ちを分かりあえる、共に生活する仲間の存在、②GHで生活をする中で得る達成感や役割意識から自分への自信をつけ、やがて自立への内的要求へとつながっていく、自立を援助するという観点からのGH、③生活をしながら障害者の個々の状況を把握し、問題に対して迅速な対応を行わなければならないという、アフターケアの重要性④仕事から帰ってきた後や休みの日などの世話人や共に生活する仲間とその日あった出来事や些細な話をする事によってその人が抱える悩みや思いを浮き彫りにし、支援していく、GH内での“愚痴聞きケア”の4点について考察した。

そして、以上の4点を踏まえ、就労する知的障害者の就労・生活支援におけるGHの役割として、(1) 小さなことから悩みまで話す事ができ、互いを分かり合える仲間の形成の場 (2) 就労の定着支援・離職後のアフターケアを行っていく (3) 世話人が中心となり、支援機関・学校などと連携を図る事で、障害者の周りを囲むような一つの地域支援ネットワークを形成する (4) 日常生活でのコミュニケーションを活かして相談支援を行っていくという点があげられる。そしてそれは、知的障害者就労支援研究報告書内の【本人向け調査結果 就労支援機関に期待すること】においてあげられている、①就業後の定着支援 ②就業先の開拓とマッチング ③相談支援 ④就業先のパイプ役の4点と合致する。GHは今後の知的障害者の就労促進において、就労支援・生活支援一体型機関として機能し得るもの、いや、機能せねばならないものであるのだ。そして、GHを今後更に機能させていくためには、GHの機能を知的障害者本人に理解してもらう必要がある、就学時の段階から、学校を中心にGHに関する情報を提供し、見学や体験などを計画的に実施していき、就労支援機関においても、就労を行う利用者に対してGHに関する情報提供を行うべきである。

6. 今後の課題

今回の調査の限界性として、第一に、聞き取り調査の事例が8事例(そのうち2事例は2名で1事例)と、少数のものとなってしまった事、第二に、調査対象者に関して、ほとんどの事例が障害者本人のみとなってしまったため、客観的視点に欠けている事があげられる。そのため、今回の調査で明らかになった結果において、偏りが出てしまった事は否めない。

この調査結果を、より有効なものとしていくには、障害者本人に対する調査に加え、GHの世話人、親などからも聞き取り調査を行う事で、様々な視点から見たGHの存在・役割を導き出せるのではないかと考える。

また、GHでの生活経験のない障害者、また、企業就労を経験していない障害者に対しても調査を行う事で、今回の対象者にはないGHに対するイメージや希望などを聞き取る事ができ、より正確な調査結果が得られるのではないかと考える。

7. 参考文献

- ・東京都社会福祉協議会・東京都知的障害者特別支援学校就業促進研究協議会(2008)「福祉、教育、労働の連携による知的障害者の就業・生活支援 ～連続性のあるチーム支援モデルの提案～」知的障害者就労支援研究報告書
- ・松為信雄(2002)「障害者の雇用促進と福祉の連携ーリハビリテーションを視点としてー」
季刊 社会保障研究 37(3) pp. 218-227
- ・松為信雄(2007)「障害者支援の在り方」
第63回障害者雇用部会講演(2007年8月23日収録)
- ・成長力底上げ戦略構想チーム(2007)「成長力底上げ戦略」(基本構想)
- ・厚生労働省(2007)「『福祉から雇用へ』推進5か年計画参考資料」
- ・多様な雇用形態等に対応する障害者雇用率制度の在り方に関する研究会(2007)「多様な雇用形態等に対応する障害者雇用率制度の在り方に関する研究会報告書ー多様な雇用形態に対応した障害者の雇用促進をめざして

ー」

- ・中小企業における障害者の雇用の促進に関する研究会(2007)「中小企業における障害者の雇用の促進に関する研究会報告書ー中小企業における障害者雇用の促進を目指してー」
- ・福祉、教育等との連携による障害者の就労支援の推進に関する研究会(2007)「福祉、教育等との連携による障害者の就労支援の推進に関する研究会報告書ーネットワークの構築と就労支援の充実をめざしてー」
- ・舛添臨時議員提出資料(2008)「『新雇用戦略』について」
第8回社会保障審議会少子化対策特別部会資料
- ・日本障害者雇用促進協会 障害者職業総合センター(2002)「知的障害者の就業と生活を支える地域支援ネットワークの構築に向けて」調査研究報告書 No. 53
- ・鈴木良子、菊池恵美子、渡辺修(2005)「東京都における知的障害を有する者の就労支援施策に関する研究」日本保健科学学会誌 7(3) pp. 315-323
- ・塩川貴広(1995)「知的障害者の社会的自立に関する一考察」情緒障害教育研究紀要 第14号 pp. 133-137
- ・川岸梅和、龍井慎一郎(1999)「知的障害者のグループホームに関する研究ー東京都内2地区のグループホームのケーススタディー」日本建築学会計画系論文集 第521号
pp. 203-207
- ・小田史(2003)「知的障害者グループホームにおける生活援助」大阪健康福祉短期大学紀要 pp. 21-32